

○地域貢献研究 T-1

研究課題

茨城における地域在住障がい者に向けたスポーツプログラム運営の組織化に関する研究

○研究代表者 理学療法学科 准教授 橘 香織

○研究分担者 作業療法学科 教授 堀田和司

(5名) 作業療法学科 助教 岩崎也生子

作業療法学科 嘱託助手 石田 菜月

理学療法学科 嘱託助手 愛知 裕子

付属病院理学療法科 久保田 蒼

○研究年度 平成27年度

(研究期間) 平成27年度～平成29年度(3年間)

1. 研究目的

研究代表者らは2011年度～2014年度地域貢献研究において、地域在住障がい者が利用可能なスポーツプログラム(IBARAKI Sports for Everyone!：略称ISEプログラム)を開発した。このプログラムは本学体育施設を利用し、在学生・卒業生がスポーツボランティアとして参加して行うものである。利用者にとっては車いすに乗ってスポーツをする機会の創出、大学にとっては人材と施設を生かした地域貢献、そして在学生・卒業生にとってはスポーツボランティア活動を通しての人間形成、と参加・関与するいずれの立場においてもメリットがある活動を目指している。

研究代表者らはこれまでの研究において車椅子バスケットボールを中心に定期的にISEプログラムを実施し、参加者にとって心身の健康増進効果があることを示してきた(橘, 2013)。ISEプログラムをしっかりと地域に定着させより多くの方に利用していただけるものにするための次の課題としては、受け入れる側のスタッフの人数の増加ならびに質的向上を図り、多くの参加者を受け入れ可能にするための組織としての発展を目指すこと、そして、地域の中で車椅子を利用したスポーツプログラムに対してどのようなニーズがあるのかを把握し、そのニーズに応えられる多様なプログラムコンテンツを育てていくこと、の二点があると考えている。

そこで、本研究の目的は、ISEプログラムの運営の充実を図るために、①スポーツボランティアとして活動するスタッフの質的向上ならびに活動継続に必要な要因を検討すること、そして②茨城県においてどのような障害者向けスポーツプログラムへのニーズがあるかを明らかにし、自治体や教育機関と連携して障がい者スポーツの普及・発展を推進する組織づくりの基盤を構築することである。平成27年度は上記①の目的について中心に取り組んだ。

2. 研究方法

①対象

ISEプログラムの中でも最も利用者の多い車いすバスケットボールを行うプログラムである「車いすバスケットボールビギナークラス(以下、ビギナークラス)」ならびに「車いすスポーツ体験会」の運営に継続して参加したスタッフ9名(他大学の学生を含む大学生スタッフ5名、社会人スタッフ4名)を対象とした。

②方法

4月～7月の間の土曜日で春クールとして計10回、9月～12月の間の土曜日で秋クールとして計10回、合わせて年間で20回のビギナークラスを開催した。スタッフはスーパーバイザーの指導の下、年間を通してコーチとして参加した。9月にスタッフに対し、外部から講師を招いて、主にコーチングに必要なコミュニケーションスキルと目標設定についてのコーチング研修会を行った。その講習会にて、コーチ自身の目標設定を行い、秋クール中

は定期的にスタッフ相互で行うボディコーチングという手法を用いて、自身の目標内容とそれに対する達成状況について確認しあった。春クール終了後および秋クール終了後に、質問紙を用いて、各クールを振り返っての所感を以下の項目に従って言語化し記録した。

- ①スタッフをやって一番楽しかったことは何か
- ②次のクールで是非やってみたいこと
- ③悔しかったこと、改善したいこと
- ④ビギナークラスにスタッフとして関わる自分自身の目的は何か

なお、本研究の発表に際し、参加スタッフには研究の趣旨と内容、および記録の取り扱い方法について説明し、記録内容の公表について同意を得た。

3. 研究結果

2015年度のビギナークラスは、茨城県内外から28名の障がい児・者ならびに健常者が参加登録し、実際に20回のクラスで参加した人数は延べ393名であった。

スタッフの業務内容としては、①事前準備として毎週事前に実施したミーティング(前回実施時の振り返りをもとに次回の練習内容の確認と役割分担)への参加、②当日の業務として車椅子や道具の準備、参加者の体調チェック、車椅子への移乗介助、技術指導や活動サポート、ゲームコーチング、審判、終了後の体調チェック、後片付け、③クラス終了後にその日の反省や振り返り、であった。

スタッフ自身の活動継続に対するモチベーションに関わる①と④の観点について着目した。①スタッフをやって一番楽しかったことは何か、について、コーチング研修前はいずれのスタッフも「参加者の成長が感じられること」というやや客観的な視点からの所感を挙げていたが、コーチング研修後は「参加者と一緒にバスケットをすること」「参加者と感情の共有ができたこと」「参加者や自分の成長」など、参加者とスタッフ自身が同じ経験をする中で共に成長を実感し、喜びや悔しさと言った感情を共有するという態度に変容していた。

また、④スタッフとして関わる自分自身の目的は何か、という問いに対しては、研修前後での変化において学生スタッフと社会人スタッフでの記述内容に違いがみられた。スタッフとしての経験年数が短い学生ボランティアが挙げた内容の特徴として、「自分自身のバスケットボールの理解やスキルの向上」「障害がある方とのかかわり方を勉強したい」等、自分の学びの場を得ることを目的としていることをうかがわせる内容が多く、それは研修の前後でもほとんど変化はなかった。一方、社会人スタッフやスタッフ経験年数が長い学生ボランティアは、コーチング研修前は「使命感」「参加者の成長を支えたい」「車いすバスケットボールをもっと普及したい」といったややもすると義務感を伴う目的を挙げる者が多かったが、コーチング研修後は「車いすバスケットボールの楽しさやこのクラスの楽しさを再認識できる」「自分の役割や居場所があると感じる」「自分自身の人生を豊かにできる」といった、スタッフ自身のアイデンティティの醸成に関わる内容が挙げられた。

4. 考察(結論)

9月に実施したコーチング研修会は、コーチとしてのコミュニケーションスキル向上と目標設定(スタッフ自分自身がどうなりたいか)を意図したものであった。この研修会とスタッフ相互のボディコーチングを通して、スタッフと参加者のみならずスタッフ間のコミュニケーションが深まり、それによってさらに彼ら自身のプログラム運営への参加の主体性が増したのではないかと考えられる。それにより、研修前のクラスに比較して研修後でのクラスでは、スタッフとしての参加理由や目的意識に変容が見られたと推察される。これらの知見は今後のプログラム運営のスタッフ増員および質的向上を図る上で重要であるとともに、本プログラムが学生の卒前卒後教育において地域で活躍できる人材育成にも活用できる場であることを示すものと考えられる。

5. 成果の発表(学会・論文等、予定を含む)

下記の学会にて発表予定である。

第20回茨城県理学療法士学会(2016年7月)

第18回医療体育研究会 日本アダプテッド体育・スポーツ学会合同大会(2016年7月)

6. 参考文献

橘香織, 石田菜月, 相楽未由樹, 久保田蒼, 金井欣秀, 青柳亜希, 齋藤由香, 六崎裕高, 和田野安良, 水上昌文. 車いすバスケットボール初級教室への参加が障がい児・者の身体機能及び競技パフォーマンスに及ぼす影響. 茨城県立医療大学紀要(18) p.25-32, 2013.